

1969年8月18日(月) 決勝																					
時間 4時間16分(13時00分～17時16分) 観衆 55,000人 審判 郷司/小西/三宅/山川																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	計	盗塁	失策
松山商(愛媛)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	
三沢(青森)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

松山商(愛媛) 投手																			
投手	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上	井上
捕	大森	光生	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一	福永	純一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二	福野	和寿	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	谷岡	潔	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	久保田	俊郎	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
五	井上	明	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
六	西本	正夫	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
七	平岡	孝史	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
八	田中	茂	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

三沢(青森) 投手																			
投手	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田	太田
捕	八重	沢	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一	小比類	巻	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二	太田	幸	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	桃井	久	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	菊池	弘	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
五	高田	邦	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
六	谷川	義	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
七	滝上	哲	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
八	立花	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

決勝では史上初の再試合となった延長18回の熱戦

延長 15回裏



三沢1死満塁、三塁走者菊池は立花の遊ゴロで本塁を突くが封殺。捕手大森

延長 16回裏



三沢1死満塁、高田がスクイズ失敗、三塁走者小比類が飛び出し三塁でタッチアウト。捕手大森

延長 18回



引き分けとなり、本塁前に整列する松山商と三沢の選手たち

1969年8月19日(火) 決勝再試合																		
時間 2時間6分(13時00分～15時06分) 観衆 50,000人 審判 郷司/小西/三宅/山川																		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	盗塁	失策						
松山商(愛媛)	2	0	0	0	0	2	0	0	0	4	1	1						
三沢(青森)	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	1						

！ 全国高校野球選手権大会の名場面を振り返る「あの夏」の第8シリーズ、1969年の第51回大会決勝「松山商—三沢」は、8月1日まで計50回(原則火～土曜日に掲載)を予定しています。

あの夏 1969年 松山商 × 三沢

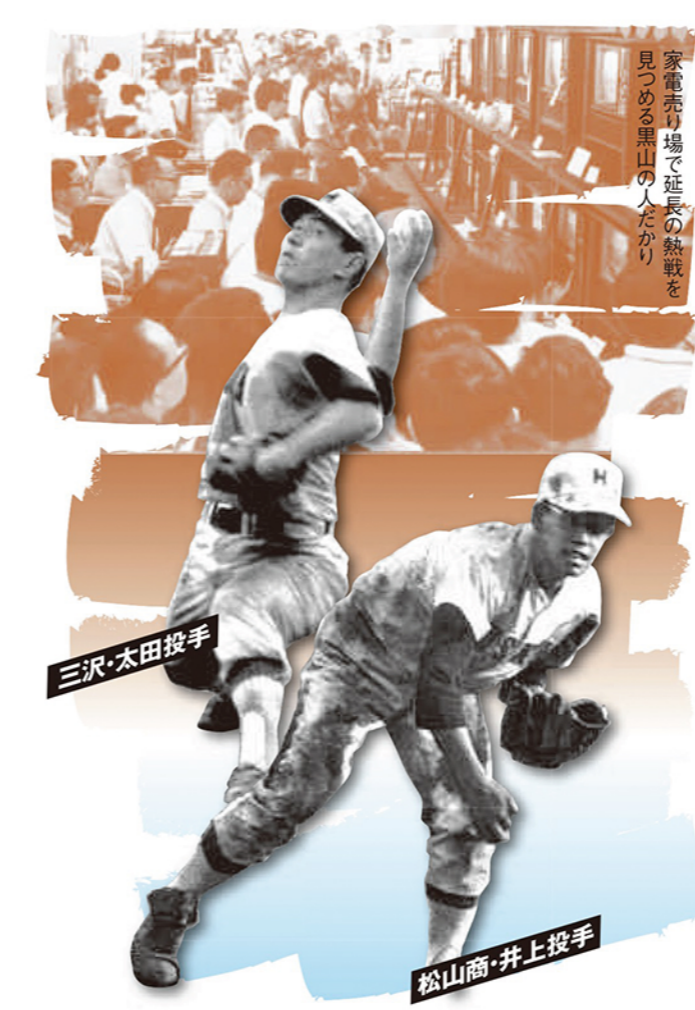
終わらぬ「0」列島くぎ付け

もう46年も前のことなのに、くつきりと思いつける。ぼくは愛媛・松山の郊外に住む小学1年生だった。夕方になると、皿で瀬戸内海からの風がやむ。シリシリと暑い6畳の居間で、白黒テレビの画面を食い入るように見ていた。松山商(愛媛)と三沢(青森)が戦っている。得点は「0」の列が続く。三沢のエース太田の快速球に松山商の打線は黙りこくった。「松山商が負けるわけがない」。そう思っていたが、延長十五回裏、いても立ってもいられなくなった。1死満塁の大ピンチになった。ふと隣を見て驚いた。白いシャツとステテコ姿で寝そべって見ていた、ふだんは偉そうな父の、たばこを持つ右手が震え始めた。灰が落ちてうなづき、ふるふる。

投手・井上はストライクが入らない。ノースリー。泣きそうな表情の井上を見て、我家からお母さんたちが泣きながら出てきて、井上端会議を始めた光景を覚えていた。松山は街頭テレビの前以外、静まりかえった。当時の愛媛新聞は「ふだんは200人ほどが居るパチンコ屋の客は3人。映画館の客はゼロだった」と伝えている。地元だけではない。田舎も都会も、日本中がこの試合に身動きがとれなくなった。取材で青森を訪ねたとき、居酒屋で隣に座った大学教員(55)がこの試合の話をしてみた。「あー、あの試合」とすくなく思い出を語り始めた。岩手県岩泉町という山あいの町に住む小学4年生だったという。「すごく暑い日で川で泳いだのさ。そして、どこからか『甲子園でなんかすごい試合やってる』って。友達と一緒に走って家に戻った。三沢高校なんて知らねえ。だけど、太田っていう投手がでかく見えた。フォームもダイナミックだし『すげえー、すげえー』って」。

東京でも百貨店の家電売り場に人が群がった。中継映像にはニュース、受信相談、あなたのメロデー……など番組休止を告げるテロップが次々と流れる。1カ月前のアポロ11号の月面着陸と同様、みんなテレビに吸い込まれた。この2日間にわたる決勝を題材にした『延長十八回』(終わらず)というノンフィクションが、25年後の1994年に出版されている。著者の田澤拓也は、青森県の津軽半島でテレビに見入る青森高の3年生だった。物書きを志していた田澤は、翌日の再試合で三沢が負けてすぐに「いっか本を書こうと思った」という。

それからさらに21年。松山商・一色、三沢・田辺の両監督は世を去っている。ぼくは聞きたいことがいっぱいあったが、残念ながら叶わなかった。長く夏の甲子園優勝率1位を誇った野球王国・愛媛県の名門校と、甲子園で4強にも入れなかった青森県の無名校が対戦したのは8月18日。奇しくも、今から100年前に第1回の全国中等学校優勝野球大会が開かれたその日に、次の半世紀へ踏み出す第51回大会の決勝があった。後世に残る芸術作品のような対決を忘れないように、うっすらと埃をかぶった歴史の扉をたいてみよう。



このシリーズは酒瀬川亮介が担当します。敬称は原則、略します。